

○船舶工兵第二三連隊 暁 六一六一

フロレス島マルメラ

○船舶工兵第一四連隊 暁 六一六二 ジャワ

○船舶工兵第一五連隊 暁 六一七六 泰国

○船舶工兵第一六連隊 暁 一六七〇 サイパン

○船舶工兵第一七連隊 暁 一六七〇 父島

○船舶工兵第一九連隊 暁 一六七〇 ミンダナオ

○船舶工兵第二〇連隊 暁 一六七一 セラム島

○船舶工兵第二一連隊 暁 一六七一 比島

○船舶工兵第二二連隊 暁 一六七四

柳井―野田、静岡―伊東

○船舶工兵第二三連隊 暁 一六七四 沖繩

○船舶工兵第二四連隊 暁 一六七四 比島

○船舶工兵第二五連隊 暁 一六七四 比島

○船舶工兵第二六連隊 暁 一六七四 沖繩

○船舶工兵第二七連隊 暁 六一五一 北海道

○船舶工兵第二八連隊 暁 一六七五 比島

○船舶工兵第二九連隊 暁 一六七五 九江

○船舶工兵第三〇連隊 暁 一六七五 台湾

○船舶工兵第三二連隊 暁 一九七四 比島

○船舶工兵第三三連隊 暁 一九八一 上海

○船舶工兵第三四連隊 暁 一九八一 汕頭

○船舶工兵第三六連隊 暁 一九八三 木浦

○船舶工兵第三七連隊 暁 一九八三 仙崎

○船舶工兵第三八連隊 暁 一九八三 釜山

○船舶工兵第五七連隊 暁 六一五五 函館

〔改海上機動第三旅団輸送隊〕

○船舶工兵第五八連隊 暁 六一七五 新潟

改泛水作業隊

明号作戦

仏印シタデル兵舎攻撃

富山県 小坂 儀 一

生家は農業を営んでおり、私は、農家の長男として大正四年十二月十六日、富山県射水郡小杉町戸破四七七〇で生まれました。長男ではありませんが、農業に

適する体格でもなく、次男の弟が農業を継ぐことになりましたので、分家して東京の日本橋横山町の問屋に勤めました。昭和七年三月のことです。仕事は婦人用品の卸し業で、三越、松屋、松坂屋、新宿ほていや（後に伊勢丹）などのデパートへの納品でした。当時は自動車ではなく、リヤカーを自転車で曳いてのことです。

昭和十一年兵として徴兵検査を受けるため故郷に帰ったのですが、身長が足らず丙種合格、十二月一日、第二国民兵編入となりました。当時は、支那事変勃発前であり、甲種でなければ現役入営できず、甲種という立派な体格の者でも籤逃れといって、現役に入らなかつた者もいたくらいでした。

満州事変から五年と経過し「非常時」といわれた時代ですが、丙種の者は軍隊へ入れぬのですから、再度上京しました。しかし、納品係から外交係へと昇給はしましたが、どうも私の性格に合いませんので心を悩ませていました。

このころ、日比谷の交差点の角に「美松」というデ

パートがあり、その会社がつぶれ、営業部長らの幹部が、京都「丸物」の子会社「松菱」を設立することとなり、私もその幹部の人にかわいがられていたもので、売場の事務をとのことでした。松菱デパートは静岡県浜松市に開業し、これならやれる、性に合うと思いい勤務を続けておりました。そのころになると、国もだんだんと戦時態勢へと向かっていました。

昭和十五年のお盆に墓参りのため帰省中のことをちょっと話してみます。小学校一年先輩で我が家の斜め向かいの幼な友達の堂田君というのが来られました。「小坂君、いるかい」「まあ入って一服しろよ」などやりとりしていると、彼は家上がり込み、差し出したお茶も飲まずいきなり「君、今の日本がどうなっているか知っているだろう。「討ちてしままん、討ちてしまんの非常時だ」。この非常時に、デパートなんかのんびりと勤める時ではないだろう。君それでもよいのか」などと荒々しく口走ったのに私はびっくりして、開いた口が塞がりませんでした。彼のあまりの豹変ぶりに、かつての親友の顔が消え失せていました。

彼は私より一年早く上京、私も後を追って上京し、勤め先は違っていました。いつも落ち合っては語り合い、励ましあっていた友達でした。彼は徴兵検査で甲種合格入営、間もなく満州関東軍へ、やがて満期除隊となり下士官適任証をもらって帰って来たとは聞いていました。すぐ上京するものと心待ちにしていたのですが、ついに上京せず、その後、ぶつりと音信が絶えてしまっていたのでした。

彼が、我が家から帰った後、父から聞いたところによりますと、除隊後警察官となり、今では特高警察官だそうなので顔をしかめて語っていました。

そのころ大東亜開戦前でもあり、中国の戦況や、ヨーロッパの戦況も、勝ったニュースばかりの時でありました。特に私は徴兵検査で丙種合格、第二国民兵役となつて、軍人には全くの無縁のものと、専ら勤めに励み、人並みの青春の日を過ごしていたところ、仕事も配給制度、物の流通も不自由となる。戦況も少しずつあやしくなってきました。

昭和十八年八月、突然家から電報がきました。父か

母かの病気かと、読んで見ると何と「アカガミ キタスグ カエレ」とあります。私は何かの間違いではと思ひ電報を打ち返し確かめたものです。このとき、私は数え歳二十八であったので、私のような者にまで召集がかかるようでは、日本もいよいよ危なくなつたと思ひました。

戦時名簿により日時などを確認してみますと、『昭和十八年八月十七日臨時召集により輜重兵第五十五連隊応召、同第二中隊編入』とあります。私は金沢の輜重兵連隊へ入隊しました。しばらくして、この度の召集は仏印派遣軍要員と知ることができました。戦時名簿の続きを読みます。『九月二日第五十二師団歩兵第七連隊動員下令、九月十四日動員完結（第五十二師団とは柏兵団）』。これからが仏印のことでしょう。『九月二十一日、輜兵第二十一連隊転属のため屯宮出発、同日金沢出発、同月二十二日大阪着、同日大阪港出発』とあります。我が部隊は、九月半ば過ぎ追われ者のように、ひっそりと金沢を出発し、大阪へ着く、ここでも闇夜に乗じ逃げ込むように乗船しました。船

名は「ハアブル丸」七千トンの貨物船でした。

二十五日に九州の三池港に寄港、二十八日に三池港出発とありますが、どこか辺りで船列を整えたのかは知る由もありませんが、とにかく、四・五十隻もの大船団であったと思われています。

私たちと同じ召集者は百五十人くらいでしたか、この船には千人か二千人かは分かりませんが、大動員でしたから。我々は船底にぎっしり鮪詰め同様に詰め込まれ、身動き一つできなかったのですが、飯上げ当番兵には小言は出さず素直に身をよけていました。私も勿論、当番に何度も立ちましたが、だれも文句を言いませんでした。当番のときは、上甲板で食器洗いをしますが、その後四肢を存分に伸ばし、潮風を腹いっぱい吸うことができたのが何よりの息抜きでした。

七千トンの船も大海に出ると、晴れた日でも波は甲板を洗い浚っているの油断はできませんでした。全員はいつも四角の救命胴衣を前後に振り分け身につけて沈没に備えていました。『十月三日、澎湖島馬公寄港、同月六日馬公出発』とありますが、寄港しても上

陸できない。兵籍簿で見ると、仏印サイゴン上陸まで二十日間とありますが、船から一步も出なかった我々にとつては一カ月もかかったと思われました。もうそのころは台湾付近、バシー海峡などには敵の潜水艦が出没し、船団を次々に雷撃するので、支那の沿岸ぞいに縫うようにしながらの航行ですから日数もかかったと想像されます。

四・五十隻という大船団に数隻の駆逐艦が前を後にと護衛していたと記憶するのですが、敵の魚雷を受けて夜の海に炎上し沈没した僚船を、幾度も、まざまざと見ましたが、身の凍るような思いでした。いつの日か我が船もと思うのですが、その半面、私も「途中でやられたら仕方ない」とにかく、海上で沈没すれば何もできないのですから観念していました。幸い我が「ハアブル丸」は無事に十月十三日サイゴン着、上陸することができました。

上陸第一歩の印象は、南方ならではの特有の自然の美しさに出会い感動しました。第二の印象は埠頭などで働く人たちの目と顔と所作に精彩がないことでした。

南方ボケか、我々も長く南にいますとそうなのかな、と戦友などとささやいたものでした。

十三日に輜重兵第二十一連隊（第二十一師団討兵団）に転属、サイゴンに一週間ほど駐留後、サイゴンを出發して北部のハノイ近くのバクニンに向かいました。汽車の旅でしたが、薪を焚いて走るガタガタの貨物列車で、駆け足でいつも飛び乗れるようなお粗末な汽車です。約一週間でようやくバクニン着。連隊長は西沢勇治中佐であり、自動車隊と駄馬隊とがありました。

連隊長は部隊の兵を広場に整列させて我々を迎えてくれました。西沢連隊長は「こりと微笑しながら『何とかかわいい兵隊が来たものだ』との言葉である。何しろ我々は召集兵ばかりで現役兵より身長は十センチも低いから、そんな言葉が出たのも無理はなかったと思います。

私は第四中隊編入、自動車隊でした。教官は木村少尉で、指導を受けることになりました。木村少尉は幹部候補生出身で、私のような不器用な者にも体罰はあらか、叱ることなく優しく教えてくださいました。戦

後、今日まで自動車の運転ができきるのも木村少尉のお陰と感謝しております。当時の車はトヨタの貨物車（トラック）で、エンジンは直立八気筒、ハンドルは「転把」と呼ぶなど、全部日本名で呼称させられ、今日でもその名称を少しは覚えています。始動（エンジンをかける）は車の前面に立って、クランク棒を腕の力で回転し、エンジンをかけたものです。

どうか一期の検閲も終わると転属の命令が出て、ハノイ郊外のチャラム飛行場（飛行機は一機も無かった）近くの師団防疫給水部の針谷軍医中佐の針谷部隊へと行つたのです。転属命令によれば『十二月二十四日討参動第二三二号に依り、第二十一師団防疫給水部に転属、同日バクニン出發、同日チャラム着、同日より同地附近の警備』とあります。

防疫給水部には、本科の者がいないので、隊の衛兵、自動車給水、糧秣受領、兵員輸送など、内務では、勿論古参兵や班長の身の回り、武器の手入れなどに追われ、その上風呂当番となると水槽を牛車に積んで、ガタガタの坂道運び、毎日降るスコールに濡れた根枝

を拾い集めて風呂を焚きます。時間までに沸かないと
週番下士官などに気合を入れられるなど、今思い出せ
ば懐かしく、二度とないよい人生勉強になったと思ひ
ます。召集兵の間では私が一番年上だったので整理
ビンタは必ずもらっていましたが、私個人のビンタは
一度もなかったことは大げさに言えば、天運か神助の
お陰と思っております。

召集兵一五〇人中、五、六人の一選抜上等兵、そし
て兵長となりましたが、新任兵長時代、歩哨係で交代
兵を伴って行くと、連れて行った古參兵が「お前歩哨
に立て」と言うので一晩中立哨させられたこともあり
ました。しかし、私は特に苦痛を感じませんでした。
なぜかという、南国でなければ見られない南十字星
や曙光に映える椰子の葉のシルエットの美しさが心を
とらえたからであります。

針谷部隊は後方部隊のため輝かしい戦闘の武勲を述
べるものは少ないのですが、私らは本科兵であるので、
仏印軍と戦った「明号作戦」のシタデル兵舎突入戦に
ついて述べてみます。ヨーロッパの戦争で、仏軍がド

イツ軍に降伏してからは、仏領印度支那の仏軍は日本
と友好関係に（表面上は）あったといひます。しかし、
ドイツの降伏により状況は変化したのでした。

【解説】

仏印の日本軍は第三十八軍、司令官土橋中将で、昭
和二十年二月二十八日、參謀本部よりの命令で、南方
軍総司令官（寺内元帥）は、「仏領印度支那の処理の
命令、指示」を受領し、第三十八軍に対し「仏印の処
理」を命令した。

当時の仏印軍の兵力は約九万名（うち仏人と外人部
隊二万名、現地人七万名）、北部集団（サバチエ少将）
トンキン州四・五万名、中部集団（テュルカン中将）
アンナン・ラオス一万名。南部集団（デルシュック中
将）コーチンシナ・カンボジア三・五万名。他保安隊
五千名。

主な駐屯地

北部Ⅱランソン、ハノイ、トン、ハイフォン。

中部Ⅱユエ、キニョン、ナトラン。

南部Ⅱサイゴン、プノンペン。

これに対し、日本軍の兵力は四万名に達せず仏印軍の二分の一弱である。仏印軍は日本の面積より広いインドシナ全域に分散配置されている。これらの仏印部隊を半分の兵力の日本軍が一举に武装解除するのである。地方鉄道は爆撃で寸断、鉄橋はほとんど破壊、道路はあまり発達してない上に主な橋梁は破壊されているので敏速な作戦行動は望めない。

武装解除の期日は三月九日と決定していたが、仏印側回答の猶予時間は二時間ということで至難の技であった。そのため日本軍は奇襲か強襲かということになる。仏印側は日本軍の意図を薄々感じている。しかも表面上はあくまでも「日・仏共友好国軍隊」ということになっていて、相携えてインドシナを共同防衛する建て前になっていた。この軍隊を襲って武装解除しようというのであるから決して容易でなかった。

このような困難な状況の中で、第二十一師団（討兵団—小坂氏の所属部隊）は北部仏印に兵力部署とされ

ました。針谷部隊は特に仏軍拠点のシタデル兵営攻撃に参加しました。シタデル兵営地区攻撃主力は歩兵第八十二連隊第二大隊、歩兵砲隊、山砲大隊、工兵隊、防疫給水部所属部隊などであったということですが、我々にとって堅固な城塞総攻撃の殿りであるので、我が部隊も、敵の砲火、銃火をいやというほど浴びせられました。

私たち防疫給水部の者は、トラックの下に銃を隠し、どこかへ遊びに行くような形をとって、間隔をおいてハノイの兵舎近くに分散して下りました。夕方になり、人目につかぬよう武装して命令を待っていました。主力の歩兵第八十二連隊は師団司令部からの信号の手違いから攻撃開始を早くしましたので、それを中断し、その後九日二十二時過ぎ、日仏交渉が決裂し、攻撃の再開命令がきました。十日午前二時から歩兵の主力が、奇襲ではなく正攻法での攻撃です。

シタデル兵営の囲壁の厚さが一メートルに近くもあり、高さも二メートルほどの堅固なもので、側防火器（正面から攻撃してくる者を側から撃つ、攻撃する者

には火器の場所が分からぬ(防衛配置)が配置された、難攻不落の陣地となっていました。しかも、敵は日本軍の攻撃を防ぐべく配備し、最初には開放してあった鉄の扉も固く閉められ、入ることは不能となっていました。

この囲壁を破壊するため山砲隊が至近まで進出して直射するけれども、囲壁は厚く堅いコンクリートで固めてあるから破壊することができない。そのため歩兵隊が土嚢を積んで、梯子をかけて囲壁を越え兵営内に突入したのですが、囲壁に接近すれば側防火器で撃たれる。銃眼からは正面を撃ってくるので、多くの犠牲者を出しての突入でした。ようやく兵営の一角を占領しました。

しかし、敵は銃眼から我々後続部隊に対して猛烈な射撃です。機関銃だけではなく機動砲等に加えて戦車も出動してきました。囲壁の中に突入した隊が逐次兵舎を攻略したのでしよう。ついに正門の鉄扉が開かれ、我が軍はここから進入し、敵を圧迫し始めたのが、夕方近いころでした。仏印軍はそれでも降伏しない。交

渉中は一時攻撃を止め、最後の突撃の準備を完了したので、我々も敵弾を受けながら突撃の命令を待っていたのでした。

そのとき、岡田歩兵連隊長は敵の司令官と三回にわたって降伏勧告の軍使を送ったのだと占領後に聞きましたが、我々兵隊にはそのことは勿論分かりませんでした。しかし、十日の午後五時近くに「撃ち方止め」の喇叭が吹奏され、最後の突撃を敢行することなく、仏軍司令官は全將校一団となり投降して来たのだと、いうことも後に聞きました。

この攻撃中の我が軍は、攻撃主力の歩兵第八十二連隊で一日半で將校以下百数十名の犠牲者が出たと言いますから、もし総攻撃の突撃をすれば、我々を含め、さらに多数の戦死死傷者を出し、仏軍もおそらく殲滅されたことでしょう。占領後、我々防給部は兵営内に入り病院の警備に就きましたが、彼我の戦死者の死骸もまだあり、戦闘の激しさを物語っていました。囲壁の中には銃眼もあり防衛の堅さを知りました。私が衛兵に立った兵舎の床下が真っ黒であり、異様な匂いが

するので聞いたら、馬の血で染まっていたのだと分かりました。

日本軍は敵を武装解除し、捕虜の收容、兵器・弾薬・資材の集積と治安の維持に任じたのですが、次に、撤退した残敵掃討の次期作戦の準備をしていました。

我々は、シタデル兵宮攻撃後、残敵掃討のための我が部隊兵員をトラックに乗せ、中国との国境方面へ輸送もしました。国境付近のアンナン人も南支の言葉で話をし、国境付近の中国人も国境を越えて交流していたようでした。防疫給水部には兵站部の車も多くあり、私らは防疫部の本科兵として、防疫部の仕事を守るのが任務でした。「明号作戦」は、三月九日夕方より発起し、五月十五日に終了となったと戦時名簿に記されています。

その後、ハノイ付近の警備や、残敵掃討戦に参加したのですが、私は、兵器関係の業務も兼ねるため鍛工手の教育のため選ばれて、第二十一師団兵器勤務隊に分遣もされました。内地では経理担当の仕事をしていた者が、軍隊では自動車運転、防疫給水部とし軍医や

医務の関係、さらには機械兵器の仕事と、一般歩兵部隊の兵隊としては体験できぬ経験を積むことができた。

終戦の報は、私が仏軍将校俘虜監視所のある奥地の源流沿いの通信隊へ分遣中、天皇陛下の声をラジオで聴きました。原隊からの復帰命令を受信し、川の中洲にある三階建ての俘虜監視所を開放しなければなりません。昨日までの俘虜は戦勝国将校であるから、逆に我々分遣隊の危険が迫ってきたのです。夜を待って、金沢出身の中西兵長ら七名と船底に小銃を隠し覆いを掛け、我々はその上に寝て菰などを被り、文字通り「川の流れに身を任せ」て川を下りました。

一昼夜だか二昼夜だか、朝眠りをさますと、赤旗を立てた者が「ガヤガヤ」として我々の船を見えています。共産軍だと直感しましたが攻撃をせず、ただ見ているだけ、あるいは結果的には彼らが我々を守ってくれたことになったのかもしれない。

半分くらい川を下った所で、通信隊が原隊へ連絡し

てくれたため、原隊からトラック二台で迎えにきてくれたので、私は針谷部隊へ帰ることができました。原隊の方も通信分遣隊の所まで来る予定でした。もし行き違いになったらどうなったか、これも、極めて幸いで、神仏のお陰だと今でも思っています。

戦争後は、中国軍が武装解除し、その指揮下に入ることになっていたのですが、収容所にも入れられず、武器なども復員船に乗るまでそのまま保持してしまっていたので、小銃は勿論、機関銃も我々は持っていました。中国軍は素足にわらじ、我々は軍靴、我々は兵站を握っていたから逆に中国軍の糧秣受領もしていました。中国軍は初め少数で入って来ましたので、俘虜である日本軍が、中国軍を仏軍や現地軍などから守ってやり、衛兵勤務もしました。彼らの中には皮膚病や病気、怪我などで困っている者も多く、それらの兵隊も治療し治癒させていたので、中国軍からは「謝々」と言っている感謝されました。

その後、何千という中国軍が毎日のように仏印に入ってきましたが、同種同文というのか、中国軍の将校と

我が軍の将校が野球を楽しんでいる情景をかい間見ることも度々でした。まったく、どちらが俘虜だか分からない幸せな体験も味わいました。

私たち部隊が仏印第三十八軍最終の引揚船でハイフォン港を出航したのは、昭和二十一年四月二十一日でした。その際、特に述べたいことは、我々の引揚船にも、埠頭にベトナム人の見送り人が沢山溢れ、老いも若きも、男も女も「日本の兵隊さん必ずまた来てくれ」と叫んで盛大に見送ってくれたことでした。この二カ年有余、私はベトナムで軍務に服しましたが、この感激は忘れられず、ベトナムの平和と、彼らの幸せを今でも祈っています。このような気持ちを思っただけ、多くの日本兵が復員せず、今でもベトナムに残っているのでしょうか。

復員完結は昭和二十一年五月二日、名古屋港でした。私の戦前の生活は浜松市の松菱デパート勤務でしたので、浜松へ行ったところ、建物は米艦の艦砲射撃で、一階を残して上層部分は破壊されていました。浜松の

会社へ復帰勤務しましたが、給料は上がらず、毎日のように物価は上がる、一カ月の給料でも一週間の闇米が買えない。そのため止むを得ず富山へ帰り、中途就職のため偉くはなれないが、囑託で銀行の得意先係として昭和四十五年の定年まで勤め、続いて地元のアルミ会社の経理課長、部長として、また七十歳過ぎて建設会社の経理を見るなど、経理畑で戦後の勤めを終えました。

現在は、戦前日本橋横山町問屋時代の仲間岩手県出身の文学青年がおり、その人に感化されてか、俳句の水原秋桜子に私淑し、俳壇「馬酔木」の同人とし、また、富山地区では俳人協会会員として「燕巢会」の世話をさせていただいております。

軍隊という所、特に戦地は、皆がづらい厳しい生活、勤務をしておりますが、私は何かその苦勞に身を任せ、積極的に任務遂行をしていたつもりであります。お陰で、その体験、ものの考え方が現在の幸せに続いていると信じております。

戦友と 賀状でつなぎ 半世紀

君が代を 三代生きて 今日の日
音たてて 霧の梳きゆく 岳樺

〔俳号 灯村〕